

## 私の訴え

家島昌志  
広島被爆  
日本被団協代表理事

ロシアがウクライナ侵攻を始めてから1年半になろうとしています。核兵器の使用をも辞さないと言ったロシアの姿勢は、同盟国である隣国ベラルーシへの核配備へと進み益々危険性を増してきました。広島・長崎の惨禍から78年が経過して、また新たな人類の危機が迫っています。

2017年7月7日に122か国の賛成により国連で採択された「核兵器禁止条約」は、2021年1月22日に発効するに至り、私達被爆者にとっての長年の悲願である核兵器廃絶への道が開けたものと喜びました。これが直ちに核兵器廃絶の道に繋がるわけではありませんが、大きな前進であることは確かです。

しかし、核兵器保有国及びその同盟国は条約に参加しておらず、肝心の唯一の戦争被爆国である日本はこの条約に背を向けております。そもそも、広島・長崎型の1000倍を超えるような威力をもった核兵器が戦闘に使えるわけありません。核兵器は決して人類と共存できない兵器なのです。

広島に原爆が投下された当時、私は3歳1か月であり、ほんの断片的な夢のような記憶しかありません。自宅は広島市の北部の牛田町という爆心地から2.5キロ地点にありました。家の倒壊は免れましたが、爆風で家中のガラスは吹き飛び屋根がめくられて月が見える状態だったと言います。

原爆投下の朝、私は家の玄関の土間で遊んでいたそうです。恐らく爆風で吹き飛ばされたのでしょうが奇跡的に無事でした。母親は玄関わきの日当たりのよい部屋にいたそうですが、爆風で飛び散った窓ガラスの破片が体中に刺さったそうです。近所にお住まいの看護婦さんに手当してもらったと言います。妹はまだ10か月の赤ん坊でしたが、その日は布団袋の陰に寝かされていたため無事でした。

父親は、爆心から1.2キロの広島通信局の屋上で空襲警戒の夜警当番を終えて帰宅し二階で仮眠中でした。閃光に驚いて起き上がり、階下まで吹き飛ばされたものの無事でした。

しかし、彼は前夜から我が家に泊まって原爆投下の朝入営した親戚の新婚夫妻のことが心配で、爆心地に近い西練兵場へ出かけました。兵隊たちは黒焦げになっていて見わけも付かず、探すのをあきらめて帰宅する途中で道端に大やけどをして倒れている夫人の方を見つけました。隣の農家から大八車を借りて運び、近所の看護婦さんから分けて頂いたチンク油を塗って治療したそうです。首から胸までケロイドが広がっていました。彼女はその後再婚しました。生まれた子供には脳に障害が

ありました。彼女自身も被爆から 25 年を経て甲状腺癌で亡くなりました。間違いなく被爆の影響でしょう。

広島には 75 年間草木も生えないとうわさされ、その年の秋私たち家族は仕事のあ  
る父親を残して祖父母の住む鳥取県に移住しました。満員列車の窓から乗せられた  
というかすかな記憶があります。姉が二人おりましたが、既に広島から疎開して祖  
父母の下から学校に通っていました。翌年父親も転勤希望がかなって鳥取県に移住  
したのですが、被爆から 24 年を経て上顎癌により 59 歳という若さで亡くなりまし  
た。これは明らかに被爆の影響でしょう。私自身、被爆から 72 年を経過して甲状腺  
癌を患いました。こんな晩年に被爆の影響が出るとは思いもよりませんでした。

核兵器廃絶は、国連創設時からの大きな目標であります。2000 年 NPT 再検討会  
議で合意され、2010 年に再確認された「自国の核兵器の完全破棄を達成するとの核  
兵器国による明確な約束」の速やかな履行を被爆者は期待しましたが、その後 2 回  
の再検討会議では最終文書を採択できませんでした。次の機会に参加国の意識に前  
進がなければもう間に合わないかもしれませぬ。世界終末時計は残り 90 秒なので  
から。

唯一の戦争被爆国として、核兵器廃絶に向けて世界の世論をリードすることを期  
待されている日本政府は耳に心地よい「核兵器禁止に向けて世界の世論をリードす  
る」という言葉を発するばかりでなく、核兵器廃絶を世界に訴える真剣な取り組み  
をしてほしいと思います。

昨年の再検討会議は最終文書の採択には至りませんでした。合意に向けてぎり  
ぎりまで調整された努力を無駄にせず、今準備委員会で核兵器廃絶への道筋を示す  
議論が進められることを願っています。

有難うございました。